

茶の湯文化学会会報 No.91

第91号 / 2016年12月21日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314
http://www.chanoyu-gakkai.jp e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

平成二十八年申歲六月十二日(日)
茶の湯文化学会大会記念茶会・見学会
於 昭和美術館内 南山寿荘二階広間
担当 裏千家柏露軒 神谷宗銀

寄付床 又日莽 富士画賛

水指 鉄鉢 瑠璃南京

本席床 徳川齊莊筆 杉風

棚 長板 以熱田神宮御遷座祭本殿古材

花 破れ傘 蛸袋 河原撫子

薄器 徳川齊莊好共箱 千歳棗

花入 遠州蔵帳簾組瓢箪籠写 昭和庚午(五年)歳

以名城天守閣鯨の真木 尾張徳川家什物

香合 徳川齋莊好 以羽栗郡玉の井之井筒古材

替 辻玄哉好ナニヤロウ 以寫造

釜 鵬雲齋玄室好同書付 桐文 筒 角谷與齋造

替 徳川齋莊手造共箱 銘三保の松原

風炉先 日比野山益 小習十六ヶ条許状

替 町田秋波在判共箱 以寫造

天保十五(一八四四)甲辰春正月

替 箱の甲書 宗味坊の吾妻にまかりて京への帰途浪

茶碗 徳川齋莊手造共箱 銘三保の松原

替 越へ立寄りけれハはなむけしとて

茶杓 渡辺又日莽手造共箱 馬土杯 銘千代の友

替 土産にのこせ ふしの鶴芝

蓋置 斗々屋 鵬雲齋玄室書付 銘青苔

替 銘千代の友

同 斗々屋 鵬雲齋玄室書付 銘青苔

替 以嵯峨竹

竹 引切 明日庵玄中在判共箱

替 以嵯峨竹

以嵯峨竹

替 以嵯峨竹

以嵯峨竹

替 以嵯峨竹

以嵯峨竹

替 以嵯峨竹

以嵯峨竹

替 以嵯峨竹

以嵯峨竹

替 以嵯峨竹

以嵯峨竹

替 以嵯峨竹

以嵯峨竹

替 以嵯峨竹

以嵯峨竹

替 以嵯峨竹

以嵯峨竹

替 以嵯峨竹

以嵯峨竹

替 以嵯峨竹

以嵯峨竹

替 以嵯峨竹

以嵯峨竹

替 以嵯峨竹

以嵯峨竹

替 以嵯峨竹

以嵯峨竹

替 以嵯峨竹

以嵯峨竹

替 以嵯峨竹

菓子 寿色

美濃忠製

器 ラスター彩 舟形 銘風韻

加藤卓男造

替 義山 平

煙草盆 加藤清正 秋幾波函 寸松軒直書

七七翁・長谷川如竹造

火入 柴付 松月梅文

真函 東大寺伎楽面 以春日神代杉

市川鉄琅造

煙草盆書付

慶長年中加藤主計頭清正、東照宮公の仰せを

奉じて義直卿の為に名古屋城の天守閣を築し

上棟の時祝哉陳日に下物を釘箱に盛りしを

古画にあり嘗て藩中当時の釘箱朽たるを是追

慕措々縮模して永々に家に供ふ

有合庵

一畳台目

竹腰蓬月筆 扇面 高田太郎庵筆 瀑布

広間床 竹腰蓬月筆 扇面

寛喜元年女御入内御屏風和歌写

月次屏風歌合せ

花 矢筈芝 白紫陽花 穂先下野

藤宇津木 ウツボ草

花入 鵬雲斎玄室好 檜の精形籠

竹腰蓬月筆 扇面 寛喜元年女御入内御

屏風和歌写 月次屏風歌合せ 寛喜元年

(一一二九) 女御入内御屏風 和歌 十一月

二十三日

関白・藤原道家の長女 子が後堀河天皇の女

御となつた時の屏風歌

作者は、道家(関白)、公経、実氏、定家、為家、

家隆、知家

月次屏風歌 各月三題三首、計三十六首。混

絵屏風歌二首、合計三十八首を行能が清書。

屏風は十一月二十四日に天覽。

一、君がためのべのしら雪うちほらひ いや

としのはをつむみかなかな 三月

二、春の日のひかりにひおふやまさくら 花

のさかりは風もさはらず 四月

三、なつ衣おのれひとへのなにふりて やと

井流水

四、なかきひのもりのした草むすぶ手にし

たゆく水もあかぬころかな 七月海辺秋

風吹

五、かそふへき吹上の濱のまさごにも きみ

が世そふる秋の初風 八月山野鹿立行客

過之

六、紅葉はをこそめの山のくれないを ふり

いてにけりさお鹿の声 十月海辺千鳥

七、濱千鳥こえはやちよときこゆなり むか

しのあとをいまにつたえよ 十二月湖辺

水結

八、にはのう見水らぬ浪もなかりけり ちさ

とにすめる冬の夜の月

蓬月かく 花押

平成二十八年六月十二日(日) 茶の湯文化

学会大会記念茶会・見学会を名古屋市中昭和区

にある昭和美術館内南山寿荘二階で薄茶席、

階下の捻駕籠席を見学し、愛知県十四山村(現

弥富市)素封家の佐野弥高亭にあった茶室「有

合庵」を休息待合にして開催しました。

南山寿荘はもと渡辺兵庫頭規綱(又日暮と

号す)の尾頭坂別邸にあったもので、昭和

十年(一九三五)頃に現地へ移築。別邸は、西

に堀川があり、東に熱田神宮の鳥居のある

高台で、堀川はこの辺りでゆつたりカーブする。

そのためこの茶室の二階座敷からは、舟が建物

の中へ入ってくるように見え、「入舟の席」とも

いった。建物は斜面を利用して舞台造のように

床を高くし、床下には当初は寄付となる部屋

があった。

又日暮は玄々斎の実兄に当たり、玄々

斎も建物に関与する。棟札から天保三年

(一八三二) 又日暮四十一歳、玄々斎二十三歳

のとき造立とされる。現在は池畦に棟を東西

にして南面して建つ。木階を上がると廊下に

ある捻駕籠席前の棹縁となる。一段上に内腰

掛がある。二階座敷へ通じる廊下は反対側に

あつて中潜りの仕切り口で内腰掛と繋がる。

捻駕籠席は建物の平面に対して少し角度を

振って配置され、三方に縁が周り、丁度お駕

籠を少し捻った恰好で席名の由来となる。棹

縁が露地の一部となり、茶室の外観を造る。

吹放しの中敷居窓から外を眺望できる。内部

は四畳中板入り出炬の席で、三畳の客座と中

板を入れた点前座を遺違いとして床前の貴人

座に重心をおく間取りである。

中板が席中にゆとりをもたせると同時に貴

人座との

結果とな

る。また

正客と亭

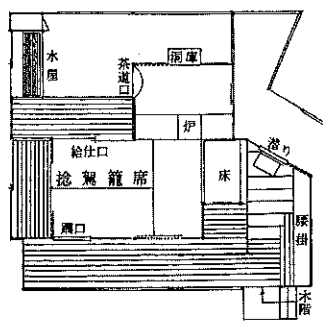
主が向か

い合い、

下座二畳

が相伴席

とみられ



捻駕籠席平面図

る。床柱の位置の柱を切って下げ束として

セットバックさせた手法は二階座敷の床構成

と似る。また点前座正面上に楊子柱をみせ

る。開放的な床構えにアクセントを添える。

天井は床前を網代天井で一段高くし、中板の

上は点前座の落天井と区別して板を張ってい

る。相伴席は隅木をおいた化粧屋根裏とする。

下座の壁面は、隅を丸めた吹抜きの横長窓が

あけられ、中央に力竹を立てる斬新な意匠で

ある。

二階座敷は主室と次の間そして四畳半の水

屋からなり、南側に縁が付く。北側にも主室

と次の間をつなぐ縁がある。主室は床脇の一

条を入れて九畳敷。床と直交して一間の棚と

一間の袋棚が並ぶ。次の間との境に玄々斎好

の扇透しの欄間がある。この欄間は玄々斎好

として神谷家の広間柏蔭斎にあり、玄々斎が

建築に関わったことの証左である。また縁

側の明かり障子は下まで格子状の棧となり、

玄々斎好として他例にもみられる。

さて当日の茶会ですが、徳川齊荘、裏千家

十一代玄々斎精中、渡辺又日暮に關わる道具

組にいたしました。

本席の掛物は齊荘が天保十四年(一八四三)

東照君の墓参に日光に旅立ちその折に霧降

瀧の水で揮毫し

たもの。寄付は

又日暮画賛で富

士山と天の羽

衣、茶碗は齊荘

手造の三保の松

原、高台の脇に

楕円形の「祖母

懐」と丸印が二

つ押され、一つは尾張藩の「八」の字印。土

は瀬戸の祖母懐、雄大な富士の絵が白釉で掛

けられた上品な茶碗です。次茶碗に又日暮手

造りの馬上盃茶碗、銘が千代の友。茶杓は又

日暮の作で銘「鶴芝」、玄々斎門下の深津宗

味への饒別の茶杓です。現在の富士駅近くに

休息所「鶴の茶屋」があり、そこから冬の富

士山を望むと、山腹を鶴が舞っているように

見えたという。齊荘は名古屋に二度来名し、

一度目は金の鯉を記念して樂旦入に五十個の

鯉香合を作らせ、また金鯉を修理した際に真

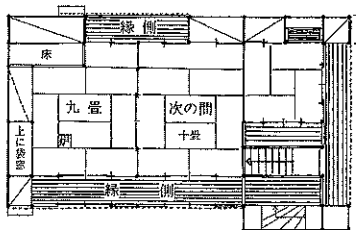
木で鯉の香合や千歳棗を好んでいます。今回

の千歳棗は長年尾張徳川家に旧蔵されて昭和

二十三年に売却されたもので尾張藩の什器目

録第二部に棗の次第が記載されています。

齊荘二度目の来名は八ヶ月ほど逗留し、葉



南山寿荘二階平面図

栗郡にある玉乃井の名水の井桁で香合を好んでいます。風炉には祖父宗銀が好んだ山里風炉を用いました。豊臣秀吉が大坂城の郭山里丸の茶屋に利休が好んだ風炉として祖父宗銀が好んだもので、特に長年尾張徳川家に眠っていた豊公の朱を使い金森春次に瓢箪蒔絵をさせています。釜には豊公に因み鵬雲斎玄室好み桐文を合わせました。替の薄器に名古屋の家元松尾流の祖といわれる辻玄哉好みのナニヤロウ棗、神津氏が『千利休の「わび」とは何か』（角川選書）で触れられていますが、本歌が松尾家にあります。この棗は町田秋波の書付があります。町田秋波は最初表千家六代原叟から名古屋に派遣された茶人で、名古屋の教授寺を道場としていましたが、急逝の後、松尾家が名古屋での指導にあたりました。秋波がこの棗に書付をしている所に因縁を感じます。齊荘が十二代尾張徳川家藩主の時、玄々斎に尾張藩茶頭として二百石で召抱えられますが、その時の尾張藩御同朋が日比野知玄斎宗永・長恭（林阿弥）です。日比野家は代々御同朋として仕えています。明治になると知玄斎は玄々斎の業躰として活躍します。我が家にある孤菴の茶席も齊荘の為に玄々斎が幅下にある知玄斎の自宅に名古屋城にゆか

りのある古材を使って造った席です。風炉先には知玄斎の父親日比野山益が玄々斎から天保十五年に拝受した小習の許状を用いました。また知玄斎の弟が町田家に婿養子に入りました。町田可玄斎宗芳と称します。現在は町田宗芳氏が裏千家業躰として活躍してみえます。水指は瑠璃南京鉄鉢形で神谷宗銀の書付です。明日庵玄中は尾張修験道の家でしたが、玄々斎の最後の業躰としての名古屋の民間の裏千家茶道を広めました。その弟子が神谷宗銀で十三代円能斎の直門でした。孤菴の茶席も明治四十四年玄中の仲立ちで神谷家に移築され、現在国の有形文化財に登録されており、また煙草盆は箱書にあるように加藤清正が名古屋城竣工時に使用したという釘箱を再好みしたというものです。有合庵は一畳台目向切炉で亭主と客の間に幅一尺四寸の中板が入る席です。床は下座床で欄口の正面にあります。点前座は入隅に一重棚を仕付け、点前座脇の中敷居窓には壁に大円窓が開けられ、障子が立ちます。隣の広間につながる壁です。床に高田良斎筆の瀑布を掛けました。良斎は表千家四代江岑宗左の五十回忌が営まれた際、六代寛々斎原叟が記念に造った五十個の

茶碗の一つ、銘「鈍太郎」を籤で引き当て、これを機会にみずから「太郎庵」と名乗るようになり、近代の大数寄者・益田孝がこの茶碗を入手したのち、自身を鈍翁と称します。晩年の太郎庵は剃髪してひたすら茶を友とした名古屋にとって誇るべき大茶人です。広間の床には尾張徳川家付家老・美濃今尾藩の九代城主である竹腰山城守蓬月の扇面です。寛喜元年（一二二九）女御入内御屏風に書かれた月次屏風歌合せを扇面に書き写した物です。和歌に対する教養の程が窺われます。



平成二十八年年度第二回理事会が、十一月二十日（日）午後二時より同志社大学寒梅館六階大会議室において行われた。理事十五名が出席し、会長の挨拶の後、田中副会長の司会進行で以下の議題について討議が行われた。議題に入る前に九月十九日にご逝去された会計監査の小川後染先生に黙祷が捧げられた。会計監査の後任人事は、会長に一任することとなった。

- 一、各担当理事より事業報告
- 二、平成二十九年年度大会について
- 三、会長候補選考委員会の編成について
- 四、無形文化遺産化について
- 五、会誌・会報について
- 六、会誌編集委員会からの報告
- 七、その他

第一号議題では、第三十九回研究会・各地例会について、出席の担当理事よりそれぞれ報告が行われた。また、東京例会の代表を来年一月より、依田徹幹事に交代することが報告された。

第二号議題では、平成二十九年年度の大会について、六月十日（土）・十一日（日）に実施することが提案され、承認された。場所については、京都（同志社大学今出川キャンパス）で行うことを前提とし、また松江市が平成三〇年に松平不昧公没後二百年を記念し、茶の湯にまつわる記念行事を実施する計画をしており、それに伴う誘致があったこともあり、松江で行うこともあわせて考えていくこととなった。中村利則副会長に調整していただくこととなった。また、大会シンポジウムの内容については、テーマを来年度「近世大名茶の湯文化―松平不昧を中心に―」、再来

年度「松平不昧公」とし、大会のシンポジウムの枠組み・選定も含め中村副会長、山田理事、宮武幹事を中心に行っていく。研究発表の公募は、ホームページ・会報で行い、エントリー締切りは一月末となった。発表者が多いときは、大会のテーマに沿ったテーマを優先させる。

第三号議題では、会長候補者選考委員会委員の選出が行われ、中村羊一郎理事、船阪理事、谷村理事が委員に推薦され、承認された。これに伴い、次回理事会までに委員会を開催し、会長候補者を選出し、総会にて決定することが決まった。

第四号議題では、十月二十九日に茶の湯の文化遺産化ワーキングが行われ、その報告と今後への展開が示された。横断的組織としての「茶の湯文化学会」の意義（抹茶・煎茶も含める）、茶の湯諸家における連携の構築（特に地域と諸家の連携）、文化庁京都移転に伴うマスコミへのアピール等。文化庁文化財部に要望書を提出して行くことが確認された。

第五号議題では、会誌については美濃部委員長より、二十七・二十八号の編集作業を進めていることや投稿原稿の応募状況などが報告された。また会報については、船阪理事よ

り、東京国立博物館にて平成二十九年四月十一日～六月四日開催の「特別展 茶の湯」の案内チラシを、十二月発行の会報に同封すること、三月発行の会報の巻頭文を、特別展の担当三笠景子氏に寄稿していただくことが報告された。

第六号議題では、美濃部理事より、会誌のオンライン公開についての提案がなされ、オンライン公開に向けて進めていき、最終的には「STAGE（国立国会図書館のオンライン）」に公開していく。著作権の問題は、一年くらいかけて著者に公開の有無をホームページや会報で問い、承認をもらったものから順次ホームページで公開していく。三年度前までの公開とする。この問題に詳しい矢野理事を中心に進めて行くこととなった。

第七号議題では、事務局より、顧客管理システムのバージョンアップの購入・ホームページ製作ソフトの購入の提案があり、承認された。第三回理事会は、平成二十九年三月十九日（日）同志社大学今出川キャンパスにて、拡大理事会として開催することとなった。

例 会

東京例会

(平成二十八年五月七日)

「宝曆から天明の茶の湯情報」

村上瑛二郎

宝曆八年刊「冬至梅宝曆評判記」は、役者評判記を模して江戸在住の文化芸能人、五十人を戯評した書だが、四人の茶人が取り上げられており、この時代、江戸で茶の湯が案外に盛んだったことが判る。この書では、一燈宗室が一年間江戸に滞在し、大活躍して江戸中の評判となり、多くの著名人の中で巻軸という別格待遇で評されていること、一方で手跡が汚いなど遠慮なく批判を浴びせられているのが面白い。一燈がこの時期に又玄斎の号を使用していた事も立証される。

天明期、江戸の茶の湯人口の増加は、川柳雑俳からも窺えるが、「好文木」からは、妙な器物を好み、伝授を振り回す茶人を皮肉ると共に、町の宗匠の出現や農村でも茶の湯がなされた事が判る。

山東京伝の「通言總籙」からは、中流の遊

「中国から日本に伝えられた

三種の喫茶法の呼称について」

岩田 澄子

従来説は、茶の形状に注目し、唐代「団茶法」、宋代「抹茶法」、明代「煎茶法」とよぶ。しかし中国の茶書を見ると、唐「団茶」、宋「抹茶」という対比は不正確で、無意味であるといえる(村井康彦『日本文化小史』一九五七年)。唐代は団茶といっても、使う時には粉末にしており、いわば「抹茶の煎じ茶」である。また宋代は、日本に伝えられた葉茶を抹茶にする方法だけでなく、『大観茶論』が示すように、団茶を抹茶にして使う点茶もあるからである。

一方、中国史料を参照した訂正説は、茶液を作る時の操作に注目し、唐代「煎茶法」、宋代「点茶法」、明代「泡茶法」とよぶ(高橋説)。「泡」は中国語で「お湯に浸す」という意味で、「泡茶」は日本でいう煎茶(急須を使う茶)のことになる。なお、明代の茶を「淹茶」とよぶ訂正説もあるが、これは日本史料に基づく見解である(橋本説)。

「煎茶法」の呼称は、従来説では「煎茶」「葉茶」の意味で明代の茶のことだが、訂正説では「煎茶」「煎じ茶(煮茶)」の意味で唐代

民階級まで茶の湯趣味が広まり、茶人に人気があり、茶家や大富豪でなくても相応の知識があることが描かれる。京窯、万右衛門、新兵衛、滝浪などの単語や値段、鑑賞法が語られ、これが「瀬戸陶器濫觴」の出現より四半世紀前なのも注目したい。京伝の他の著作からも、吉原遊女や品川宿での茶の湯の流行、日常生活に茶道具を例に引く洒落や、物好き・変人という意味で「茶人」という言葉を使う用例などが描かれている。

専門家があまり顧みない江戸文芸の戯作にも、小さな情報があり、当時の茶の湯の諸相は窺えるという視点から、いくつかの話題を紹介した。

(平成二十八年九月二十四日)

「古今名物類聚」の版下の書風をめぐって」

水田至摩子

『古今名物類聚』は、全十八冊からなる茶道具品種別の名物記で、天明七年(一七八七)の陶斎尚古老人(松平不昧の別号)の序を付す。寛政元年から同九年に四回に分けて初印されたが、不昧が編纂にどの程度かわったかについて今まで詳細に検討されることがなかった。そこで、本書の構成を整理したうえ

で、版下の書風の検討から得た若干の知見を報告し、刊行の様相を探る一助とした。

『古今名物類聚』は、管見の範囲において、基本的には一つの版木から摺りだされている。ただ、各冊の順序に諸本間で異同があり、刊行による展開の有り様を示している。版下の書風に着目すると、不昧の序と本文の大部分を、当時人気の「瀧本流」で書いている点が目できる。板元の申椒堂は「瀧本流」の法帖を多数刊行しており、「瀧本流」の商品価値を十分に理解していたはずである。書のみならず、絵画や茶の湯など、この時期の松花堂の芸術に対する需要との関連もあつたと思われる。

扉の題字と茶人の特徴書きには、不昧書風が認められるが不昧「辺倒ではない。題字は二部の隸書体である。特徴書きは不昧自身の書付が版下になった可能性を指摘したが、茶入に限定した記載である。以上は、序において新たな情報を申椒堂に寄せてほしいと述べ、不昧自身が申椒堂を介して茶道具の新たな情報を得ることに承知していたとも受け取れる記述と合わせて、第二期以降の編集に申椒堂の果たした役割が大きかったことを示唆している。

の茶、という紛らわしい事態になっている。その結果、中国喫茶研究の成果が反映されなのまま、不備が指摘されている従来説は訂正されず、今も広く使われている。喫茶法の呼称としての語を選び取るかは、語義の理解の仕方と、日中の茶文化史のどの部分を重視するか、という研究姿勢が反映された結果といえる。

呼称の混乱に対する方策として、厚生労働省が定める医薬品規格基準書である『日本薬局方』の製剤規定を参照し、日中の語義に左右されない薬剤用語(煎剤Decoctions、懸濁剤Suspensions、浸剤Infusions)を活用することを提案した。

東海例会

(平成二十八年十月八日)

「近代茶道と田中仙樵」

田中 秀隆

近代茶道を三つの転換期の内容とそこで田中仙樵が果たした役割について報告した。

明治三十一年の転換期、「明治三十一年と想像の共同」とは、近代国民国家の成立とそれにふさわしい文化形態の各領域(日本画、俳句、柔道)での模索の開始であること、昭

和四年の転換期、「茶道の記号化と昭和四年」とは、茶道が「芸術」(総合藝術)であるという見方が、知識人に共有され、世間に普及するようになってくること、昭和十五年の転換期、「皇紀二千六百年利休」とは、「茶の本」での利休のイメージと利休の茶の湯を説いた『南方録』が普及した結果、国民的な文化英雄となつて現在までにつづいていること、を説明する中で、それぞれの時期で田中仙樵が、日本文化の特質としての茶道の評価、機関紙の創刊、「茶禅一味」認識の近代的普及、点前を芸術ととらえる点茶七要の定式化、「茶花」の理論的定式化、『南方録』研究において先駆的な役割を果たしたことを述べて、伝統を近代につないだ田中仙樵の「自己変革」の営為は、文化(世界レベルで評価できる日本の文化は何かという観点で茶道を評価した)、学術(茶道が伝える内容を、制約を越えて、客観的に研究・共有しようとした)、可能性(茶道の教えに道徳原理と作法の原則を見出し、現代生活にも生かせるものと捉えた)の三つにまとめられるとの見解を述べた。

例会のご案内

東京例会

平成二十九年一月二十一日(土) 午後二時

(会場: 東洋英和女学院大学大学院)

六本木校舎

「遵生八箋に見える茶と

養生に関する一考察」 張 茹涵

「松平不昧造営の大崎苑の復元」 関口 敦仁

近畿例会

平成二十九年一月か二月に開催予定

(日程: 会場・内容が決まり次第、ホームページにてお知らせいたします)

北陸例会

平成二十九年三月に開催予定

(日程: 会場・内容が決まり次第、ホームページにてお知らせいたします)

金沢例会

平成二十九年二月二十六日(日)

午後一時三十分

高知例会

平成二十九年二月二十六日(日)

午前十時～正午

(会場: 高知県立文学館 慶雲庵茶室)

「坐禅体験」

茶席 茶の湯文化学会の研究成果を実践

する。茶の湯を一般の方々に関し

んでもらうため「床飾り」「道具

立て」はするが、お点前はお客様

第として楽しめる茶席を設ける。

時間 午前十時～午後四時まで

場所 高知県立文学館慶雲庵茶室

会費 三百円

平成二十九年 大会発表者募集

平成二十九年度の研究発表者を募集しま

す。発表を希望される方は、八百字程度の要

旨を添えて、学会事務局まで、メールもしく

は郵送でご応募下さい。大会終了後、発表内

容をベースとして論文にまとめ、会誌『茶の

湯文化学』に投稿していただけるような発表

をお待ちしております。

開催日程: 平成二十九年六月十日(土)

十一日(日)

*大会は十日を計画していますが、会場の事情により、十一日に変更になる可能性があります。

開催地: 京都

応募資格: 茶の湯文化学会会員であること

募集締切: 平成二十九年一月末

発表時間: 研究発表三十分 質疑応答十分

・メールでの応募の場合は、件名を「平成二十九年大会発表募集」として下さい。

・応募の際は連絡先のほか、現在の所属先、肩書等もあれば、併せてお知らせ下さい。

・応募多数の場合は、審査の上決定いたします。

・その他ご質問等ございましたら、学会事務局までお問い合わせ下さい。

お知らせ

※年会費未納の方は至急払込み下さいますようお願いいたします。